

—私の一橋時代—

加藤 泰史（椋山女学園大学教授）

美しいキャンパスであることはすでに知っていたが、私が初めて一橋大学に足を踏み入れたのは2002年の日本倫理学会の大会の折であった。中央東線を松本から特急に乗ってきたので、信州大学で中部哲学会が開催された後で東上したのかもしれない。国立の駅舎はまだあの三角駅舎であった。薄暗い古色蒼然とした駅内から一歩外に歩き出した時の眩しさを何となく記憶している。倫理学会の休憩時間に古い由緒ある建物を探検してみた。今から考えると、図書館や本部棟の建物だったのではないかと思う。時代を感じ、時代の雰囲気を感じてみた。左右田喜一郎はどこに研究室を構えていたのかとも思った。懇親会は佐野書院ではなかったか。古茂田茂さんが開催校を代表して挨拶をされた。その際に辛酉事件にも言及して夏目漱石の東京高商批判にも言及された。乾杯の発声の後で私を見つけて声を掛けてくださった。「加藤さん、漱石の作品は『彼岸過迄』で正しかったですか」と聞かれたので、「いいえ、『それから』ですよ」と答えて、二人で思わず顔を見合わせて高笑した。その古茂田さんの後任になるとはこの時夢にも思わなかった。父親が倒れた直後であったので迷った末に相談したら、立松弘孝先生が背中を強く押してくださった。それが無かったら一橋には異動しなかったであろう。

立松先生が野家啓一さんと始められたフッサールの読書会やミュンヘン大学でのシェーンリッヒ先生のオーバーゼミナールに参加した経験からゼミ生には厳しく望もうと決めた。時代は褒めて伸ばすことが称賛されていたので、おそらく苦々しく感じていたゼミ生もいたであろう。しかし、例えば日本哲学会に投稿して採択されたり、学振に応募して特別研究員に採用されたりするためにはゼミでの厳しい議論が不可欠だと思っていたし、今でもそれは変わらない。幸いなことに柳橋晃君や上野大樹君などのように東大や慶大から院生がもぐりで参加してくれたことに加えて『哲學』に掲載されたり学振に採用されたり、さらに津田菜里君のように日本哲学会で受賞するゼミ生も続いた。ただし、阿部謹也先生のいう「世間」にはなり得なかった。最後の一年は空中分解であった。

国立の在職期間中は斎藤慶典さんに頼まれて慶大にも教えに出かけた。慶大には他に納富信留さん（途中で東大に転出された）、エアトルさん、拓殖尚則さん、山内志郎さんといった親しい友人たちもいたので、三田のキャンパスで会って話をするのも楽しみであった。ある時斎藤さんから四～五年かけてカント哲学全体を詳しく講義してほしいと要請されて前批判期から『オプス・ポストウム』までを講義した。三年間受講してくれた大変よくできる学生さんがいた。質問は鋭く急所をついたものが多かった。結局彼女の卒論指導も手伝うことになったが、とても優れたカント哲学の卒論を書き上げた。一橋の大学院に来ないかと密かに期待したが、医学部に進学してしまった。少しだけ心残りである。慶大は高木駿君に引き継いでもらった。高木君の論文も今年『哲學』に掲載された。

東北大学での集中講義も思い出の一つである。山形や盛岡から友人たちも駆けつけてくれて東北大学の先生方と連日朝まで飲んだ後で一日講義するのは体力的にはしんどかったが、充実した一週間であった。野家さんからは最終日は午前中で終わるようにと厳命されたが、院生諸氏からせがまれて結局夕方まで講義した。最後に彼らからお土産を手渡されたのには驚いたが、正直とても嬉しかった。これまで集中講義を何度か行ってきたが初めての体験である。

実はサントリーホールにも日参した。学生時代に聴いたカラヤン/ベルリン・フィルのブラームス1番の深く静かな感動以来の名演に出逢うこともできた。ティーレマン/ウィーン・フィルのブルックナー8番（ハース版）である。ただし、アンコールは余分だった。今年中国社会科学院に就職した魏偉君にもよく会った。大概私よりも高い席に座っていた。今でもzoomで顔を合わせている。とても元気だ。王燕敏君にも中山大学の日中哲学フォーラムで会えた。着実に研究の幅を広げており、両君ともに母国での今後の活躍が期待される。

日本学術会議の問題も地方の私大に異動してみると遠い話である。教員間では話題にもならない。

今回の問題を私自身は「学問の自由」の深刻な侵害であり、任命拒否の「理由」を開示させた上で撤回させるのが筋だと解釈している。岩波文庫の『世界憲法集』を紐解くと「学問の自由」が必ずしも各国憲法の標準装備であるわけではないことがよく分かる。それゆえに、日本国憲法第23条の「学問の自由は、これを保障する」という十数文字を理解するにはその歴史的背景、例えば「天皇機関説事件」や「滝川事件」などに思いを巡らす必要があるのではないだろうか。この「学問の自由」は何よりもカントやフィヒテの強調した「学問の自律性」を原理的に含意する。学術会議問題の焦点はこの自律的基盤が掘り崩される点にある。今回の手法はナチス・ドイツが反抗的なベルリン大学を支配下に置こうとする手口に似ている。それが正鵠を射ているとすれば、次はスキャンダルの流布であろう。友人の小島毅さんの話ではそれはすでに始まっているという。今回の問題に関して私が滑り坂論法の立場に立つ所以でもある。

哲学は「理由」を問う知的営為のはずだから、拒否の「理由」を問い続ける責任があろう。哲学は殿軍を担う運命にある。先日も若尾政希先生が史学委員会委員長として挨拶をされていたが、少し前まで中野聡学長や町村敬志先生も中心的な役割を担っておられて一橋にいと学術会議は身近な存在である。それはある意味で特権的でもあるが、同時にそうだからこそ責任も重いことを意味するのではないかと思う。かつて安川一先生が研究科長時代に研究科改組に関連づけて人文・社会科学の危機にどう根本的に対応すべきかに関して教員間で問題意識を共有するためにいくつかの企画を立てられたが、参加者の数は低調であった。ワインを私費で10数本近く用意された安川先生に同情を禁じ得なかった。新しい職場の同僚の中にも人文学・社会科学の危機に関して優れた知見を持つ教員は多いが、私学ではどうしても学生確保の観点からの検討に偏りがちである。忘れていた南山時代の感覚が呼び覚まされた瞬間でもあった。純粋に学問的見地から検討できること自体が私学の立場からすればもう特権なのである。これを行使しようとするなら、胡座をかいて大学の社会的基盤を自ら掘り崩していると非難されても仕方がないのではないだろうか。新しい職場には一橋の出身者や一橋で非常勤をした経験のある教員が何人もいるので少なからぬ人が一橋からの発信に期待している。ただし、データサイエンス学部などは論外である。一橋にカタカナ学部は似合わない。

私の一橋時代は10年にも満たない短い期間であったが、かけがえのない時間であった。招聘してこのような機会を与えてくださった平子友長先生をはじめとする現旧の社会文化の先生方には感謝の言葉もない。また、旧ゼミ生を引き取ってくださった森村敏己先生や久保哲司先生、井頭昌彦先生にも改めて感謝申し上げたい。共同研究室の干場薫特任助手にもお世話になったお礼を述べておこう。最後に旧ゼミ生を含む一哲会の若手諸氏にはさらなる学問的飛躍を祈念したい。私自身はと問われれば、新しい同僚に、『1980アイコ十六歳』で作家デビューされた堀田あけみ先生がおられるので、介護問題が一段落したら、学生たちに交じって小説の作法を学んだ上で『国立(くにたち)物語』でもものしたいと思っている。